

「第4回恵那峡映画祭 脚本部門応募作品」

タイトル

「線路」

あらすじ

大樹、昇太、奈々未は幼馴染。物語は昇太と奈々未の結婚式からはじまる。3人で電車に乗っていると急停車、街が停電となる。3人は線路の上を歩く。奈々未はレールの上を歩き出し、危ないから手をつなごうと大樹に言う。大樹は、ずっと奈々未のことが好きだった。手をつなぐ大樹と奈々未。真っ暗な線路の上で、月光が奈々未の横顔を照らす。大樹はその横顔を見つめる。物語は、停電が復旧して歩きはじめる3人で終わる。

人物表

加賀大樹 (24) (18) サラリーマン

菅原昇太 (24) (18) 大樹の幼馴染

江藤奈々未 (24) (18) 大樹の幼馴染

結婚式の参列者たち

電車の乗客たち

車掌のアナウンス (声のみ)

○チャペルの外

加賀大樹(24)、他の招待客たちと並び、
フラワーシャワーの花びらを持つてる。
扉が開く。

タキシード姿の菅原昇太(24)とウエ
ディングドレス姿の江藤奈々未(24)
が出てくる。

歓声が沸く。

フラワーシャワーがはじまる。

他の招待客たちが花びらを投げる中、
大樹、奈々未を見つめている。花びら
を持った手が動かない。そして花びら
を握りしめる。

昇太、招待客の間を歩いてきて、大樹
を見つけると抱き着く。

昇太「大樹」

大樹「おい。やめろって」

昇太「俺ら、これからもずっとマブダチだか
らな」

奈々未も、大樹に抱き着く。

奈々未「マブダチ、マブダチ」

抱き合う3人に笑う招待客たち。

○高架橋の上（夜）

電車が走っている。

○電車の中（夜）

大樹、昇太、奈々未が立っている。

前の席が空いている。

大樹「あのな、普通、泊まるだろ？」

奈々未「なんで？」

大樹「新婚ってそういうもんだろ」

奈々未「外で寝れないし」

昇太「俺も」

奈々未「やっぱ家っしょ」

昇太「家、家」

大樹「マジ、わかんね。（奈々未に向かって）

ていうか、早く座れって」

奈々未「何故に？」

大樹「あのなあ。あ、おまえ、アレ、ちゃん

とつけろって。持ってんだろ」

昇太「ほんと、大樹は心配性だなあ」

奈々未「余裕だし」

大樹「バカ」

奈々未「バカ。バカ」

昇太「まあまあ」

大樹「昇太も昇太だ」

昇太「え？オレ、今、関係なくね？」

奈々未「きやははは」

大樹、服のポケットからマタニティー

マークを取り出し、奈々未に渡す。

大樹「ほら、コレ」

奈々未「え？何故に？リアルに引く」

昇太「キモ」

奈々未「え？どうやって手に入れたん？」

大樹「駅でもらった」

奈々未「え？無理でしょ。男子が？ウケる」

大樹「だから、幼馴染が妊娠してって」

奈々未「きやははは」

昇太「逆にすげえ」

大樹「お前らな、もうちよつとお腹の子のこ
と」

電車が急ブレーキ。

大樹、咄嗟に倒れていく奈々未に手を
差し出すも届かない。

昇太が奈々未を受け止める。

あ、となる大樹。

電車が停まる。

昇太「うお。あぶねえ。てか、デブった？」

奈々未「マジ死ぬ」

大樹「…」

車内アナウンス「急停車、たいへん申し訳ご
ざいませんでした。只今、付近で停電が発
生しましたとの情報が入りました。この電
車も一次停止いたします」

大樹、窓の外を見る。電車の進行方向
の地域が真っ暗になっている。

○同・電車の外（夜）

自動ドアが開いている。乗客たちが線

路の上に降りて歩いていく。

大樹、先に降りると、手を差し出す。

昇太が大樹の手を取る。

大樹「オマエじゃないっての」

昇太「いやん。いけずう」

昇太、しなを作りながら大樹の手をとって降りる。

大樹「まったたく…」

奈々未「ナナ、ジャンプしたい」

大樹「バカ」

奈々未「このくらいならイケるから」

昇太「おー。いったれ」

大樹「バカ。ダメに決まってるだろ」

奈々未「飛ぶ」

大樹「ナナ…ダメだ。オマエのお腹の中には、

新しい命が宿ってるんだぞ」

奈々未「…ちえっ」

奈々未、大樹の手を取る。奈々未の嬉しそうな顔。

大樹、奈々未から視線をそらす。

昇太「俺も妊娠したい…」

大樹「はあ？」

昇太「大樹が優しくしてくれるから」

奈々未、線路に降りると、大樹の手を

離す。

奈々未「きゃはは。今世紀史上、サイキョー

にキモい」

昇太「キモくねえし。マジだし」

大樹「…キモいよ」

昇太、大樹をくすぐる。

大樹「何やってんだ。やめろやめろって」

奈々未も大樹をくすぐり出す。

○線路の上（夜）

周囲は真っ暗。

他の乗客たちとは距離が開いており、

3人は遅れて歩いている恰好。

前方の乗客たちは、スマホのライトを

つけて歩いていて、いくつものライト

がふらふらと揺れている。

大樹たちも、スマホのライトをつけている。

昇太「あ、俺、バッテリーやべえ」

奈々未「線路の上、歩きたい」

大樹「ナナ」

奈々未「なんか昔の映画であつたじゃん」

大樹「スタンドバイミー」

昇太「あ、電源切れたあ。マジ詰んだあ」

昇太のスマホのライトが消える。

大樹と奈々未のスマホのライトだけが辺りを照らしている。

奈々未、レールの上に足を乗せて、さながら平均台のようにふらふらと歩く。

奈々未「あー、やばい。やばい。手、手」

奈々未、手を伸ばす。

奈々未「大樹、大樹」

大樹、その手を掴む。

奈々未「おっけ」

大樹「オツケーじゃねえよ」

昇太「なあ、眩しいからライト消せよ」

大樹・奈々未「バカ」

○（回想）大樹たちの通う高校・屋上

昇太（18）、大樹（18）に土下座。

昇太「マジで、この通り」

大樹「昇太、やめろって」

昇太「でも俺、やっぱ、ナナのことが好きなんだ」

大樹「わかった。わかったから」

昇太「俺、ナナに告っていいか？」

大樹「ああ」

昇太「俺ら、ずっとマブダチのままだよな」

大樹「もちろん」

○（回想）同（夕方）

昇太、奈々未（18）に告白。

昇太、頭を下げて手を差し出す。

奈々未、その手を掴む。

大樹、シヨックを受けた顔。

二人が大樹の方を見る。

大樹、むりやり笑顔を浮かべる。

○元の線路の上（夜）

大樹、奈々未の手を握っている。

昇太「マジ、一瞬だけやろ。一瞬」

先を歩く他の乗客たち、ほぼ見えなくなっている。

大樹「しょうがねえな。わかったよ」

奈々未「えー。やるの」

大樹と奈々未、各々のスマホのライトを消す。

完全に真っ暗になる。

昇太「うお。やべえ。霊出る。霊出る」

奈々未「マジでなんも見えないじゃん」

大樹「ナナ、動くなよ」

昇太「ぎゃああ。助けてえ」

その時、雲間から月が出る。

あ、となる3人。

月明かりが線路を照らす。

見とれる3人。

大樹、そっと奈々未の横顔を見る。

奈々未の横顔。

つながっている二人の手。

停電が復旧。高架橋の電灯に光が灯る。

奈々未「えー」

昇太「うお。目、やられた」

大樹「…」

奈々未、レールの上を歩きはじめる。

大樹「昇太、手」

昇太「手？」

大樹「ちゃんと繋いでやれよ」

昇太「おお」

昇太、大樹の隣に来て、大樹の手を取ろうとする。

大樹「俺じゃねえだろ。ナナ、ナナ」

昇太「なんだよ。そっちかよ」

大樹「バカ」

昇太、奈々未の手を握る。

大樹、奈々未から手を離す。そしてふらふら歩く2人を見守る。